

【全国唯研の先達に聞く】

佐藤和夫さん(2002～2004 年委員長)へのインタビュー

2022 年 3 月 13 日(日) 14 時～17 時、岩手県盛岡市内にて
インタビュアー:藤谷秀(唯研委員)、小山花子(唯研委員)

【佐藤和夫さんの略歴】

1948 年 愛知県名古屋市に生まれる。
1967 年 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学。
1969 年 同文学部哲学科に進学。
1972 年 同大学院人文科学研究科修士課程(哲学専攻)入学。
1974 年 同博士課程(哲学専攻)入学。
1977 年 同博士課程単位取得満期退学。
1978 年 東京大学文学部哲学科助手(1981 年まで)。
1982 年 千葉大学教養部助教授。
1988 年 ユーゴスラヴィア政府奨学金により海外研修。ドイツ民主共和国(東ドイツ)にも滞在。
1995 年 千葉大学教育学部教授。
1995 年 オーストリア政府奨学金により海外研修。
2000 年 フルブライト奨学金により米国研修。
2002～2004 年 唯物論研究協会委員長。
2013 年 千葉大学名誉教授。

【主な著書】

共著『現代のための哲学 文化』青木書店、1982 年
共著『市民社会の哲学と現代』青木書店、1984 年
共編著『喫茶店のソクラテス』汐文社、1984 年
共編著『公園通りのソクラテス』汐文社、1987 年
共著『生命の倫理を問う』大月書店、1988 年、
編集翻訳『ベルリン 1989』大月書店、1990 年
単著『くらしのなかの民主主義』部落問題研究所、
1990 年
単著『性のユマニスム—エロスと結婚のゆくえをさぐる』
はるか書房、1992 年
共編著『ラディカルに哲学する』シリーズ 1・2・3、大月
書店、1994～95 年

共編著『言葉がひらく哲学の扉』青木書店、1998 年
共著『男性の自立とその条件をめぐる研究』東京女性
財団、1998 年
単著『女たちの近代批判—家族・性・友愛』青木書店、
2001 年
共編著『翼ある言葉—哲学の扉<2>』青木書店、
2002 年
共編著『アーレントとマルクス』大月書店、2003 年
単著『男と女の友人主義宣言—恋愛・家族至上主義
を超えて』はるか書房、2004 年
単著『仕事のくだらなさとの戦い』大月書店、2005 年
共編著『わがままに生きる哲学—ソクラテスたちの人
生相談』はるか書房、2016 年
単著『〈政治〉の危機とアーレント「人間の条件」と全
体主義の時代』大月書店、2017 年

【主な翻訳書】

H.アーレント『精神の生活』(単訳)岩波書店、1994 年
J.ベルント『マンガの国ニッポン』(共訳)花伝社、1994
年
F.プーランド・ラ・バラール『両性平等論』(共訳)法政
大学出版局、1997 年
H.アーレント『カール・マルクスと西欧政治思想の伝
統』(共訳)大月書店、2002 年
H.アーレント『政治とは何か』(単訳)岩波書店、2004
年
J.ギリガン『男が暴力をふるうのはなぜか』(単訳)大月
書店、2011 年

【インタビュー】

●唯物論研究協会(以下「唯研」)では、歴代委員長
へのインタビューを行い、それを記録として残すこと
で、唯研の歩みをふりかえるきっかけとしたいと思っ

ています。今日は、2002年から2004年まで、ちょうど20年前ですね、委員長を務められた佐藤和夫さんに、ご自身の思想の歩みや、唯研との関わりについてお話を伺いたいと思います。お聞きしたいこと(哲学を志した経緯、学生運動の時代、唯研との関わり、近代批判・性の問題・アーレントについての研究、研究や著作のスタイルなど)を予めお伝えしたので、一通りお話いただけますか。

自分がメインストリームにいると思う人と、そう思わない人がいると思うんですが、私はメインストリームにいたという意識がどこにもありませんでした。その中の一つに唯研というのがあるのです。唯研の真ん中にいたという感覚がゼロなんです。それがなぜなのかという問題は、かなり本質的な問題でもあるし、私個人の性格もあるのかもしれないです。だから、唯研の委員長をやった時期からのことと言われると、逆に私が委員長をやらされたのは何だったのかというくらいで、そう思う感覚はそれまでの委員長の方とはちょっと違うと思っています。

それについてお話するうえで、私の個人的なことまでぜひ言わなきゃいけないことがいくつかあります。一つは、私は、本当に貧しい農民出身の、高等教育を一切受けない家庭に生まれました。両親ともが小学校(高等小学校)しか卒業していない。それから、私の知っている一族郎党の中で、私が初めて大学生になったのです。このことは結構重要なことです。大学に行くのが当たり前という人たちも当然たくさんいるわけですが、私の場合は、大学に行かないような人たちに対する関心が高いんですよ。つまり、高等教育を受けない人たちが何を考えているのかという問題が、ずっと自分の関心の中にありました。

それからもう一つは、私は哲学をやろうと思って哲学研究者になったわけではありません。それも結構重要なポイントです。もともとは美学をやりたいんです。ところが、美学の先生と話して、この人とやるわけにはいかないかと絶望した。それで研究室を出て右側を見たら哲学研究室があったから、それで選んだというわけです。それだけの理由なので、いわゆる哲学的な動機というものと自分の関心がつながって

いるかと言うと、ないと言わざるを得ない。ただし、ものを考えることについてはとても関心がありました。思考に対する関心はありましたが、哲学と称するものに関心があったわけではないのです。ところが唯研というのは、戦後はある意味哲学者の団体でしたね。もともと戦前の唯物論研究会は、哲学者はかなり中心にいたけれど、歴史学者や社会学者もたくさん結集していた団体でしたね。だけど私が唯研に興味をもった頃は、明らかに唯物論哲学研究に興味をもっている人たちが多数派でした。

この二つからすると、実はこういう問題がありました。私はたまたま東京大学の哲学科にいたんですが、その当時は、科学哲学を中心とするグループと実存哲学を中心とするグループ、あとは哲学史でした。それで、自分は誰とも本当の意味では親しみを感じなくて、自分がやりたいことは美的な問題に関わる問題だと思っていました。しかし、一応哲学科に所属したんだから、自分が所属している所のことを最初から毛嫌いするのはよろしくないという理由で、哲学に対して教えられることはきちんと学ぼうという思いはあったんです。一度、はっきり覚えてますね、哲学科の教員のひとりが私に向かって「佐藤くん、君、何か社会とか歴史とかに興味をもっているようだけど、そんなものは哲学ではありませんよ」と言ったので、その意味で違和感というのが一貫して存在していました。

東大の哲学科の修士課程は8人受かりましたが、私以外の7人は全員理科系だったんですよ。これは東大闘争と深い関係がありました。唯研では後藤道夫さんや渡辺憲正さんといった人も、もともと理科系の人でした。後藤さんから「哲学を研究したいんだけど、どうしたらいいだろうか」と相談されたことがありました。そういう状況で、東京唯研(「東京唯物論研究会」)や若手哲学ゼミ(「全国若手哲学研究者ゼミナール」)を通じて、後藤さんや、今までの委員長で言うと、吉田傑俊さんとか吉田千秋さん、石井伸男さんたちとのつながりがありました。

東京唯研は戦前の唯物論研究会を引き継ぐような組織でしたが、中ソ論争やスターリン主義・反スターリン主義の問題に関わって対立や分裂をくり返し、非常に壮絶な喧嘩をやっていた時代があったんです。

それに対して二つの重要なグループがありました。一つは年上の人たちで、古在由重さんと芝田進午さんの二人が象徴的な人です。古在由重さんは、戦前、三木清と非常に深い関係があり、丸山眞男なんかと仲が良かったので、岩波文化にも入り込んでいました。お父さんは東大の総長もやった古在由直、お母さんは清水紫琴といって、結婚しなかったら樋口一葉並みの作家になったはずの人で、若い頃は自由民権運動に携わった人です。古在由直は足尾銅山の鉍毒事件に関わり、東大総長としてとても大正デモクラシーの鑑のような人でした。しかし、その時代の男性の代表で、社会では民主主義者だが、家庭では一切女の活躍の余地はないとして、「俺の妻になったのに何で作家活動なんかやるのか」と、紫琴さんの作家活動を禁じたんです。それを見ていた古在由重さんは、この問題に深く関心をもちました。『転形期の思想—古在由重記念論文集—』(梓出版、1991年)という本で、私は古在紫琴さんと古在由重さんのことについて書いたことがあります。古在さんは唯物論哲学の中では割合有名な人でした。でも、私はそれまで付き合い合ったことはありませんでした。この点は、私にとって重要なんですが、1978年に唯研を作った時の年上の世代の人たちのうち、古在由重さん、島田豊さん、芝田進午さん、ほか数名の人たちは、1950年代か60年代にソ連を見に行き、全くひどい社会主義だと分かり、こんな社会はだめだと思ったようです。ところが彼らは、社会主義こそが貧しい民衆を救う運動であることは間違いないことだから、スターリンが悪いことをやったことは見えたけれど、これは一時の誤りで矯正可能であって、日本はそうでない道を歩めるはずだと考えたんです。その当時の左翼知識人は、マルクス主義を批判することは「反〇〇」の立場になることであり、批判はしないという固い決意をもっていた。それでどうしたかと言うと、古在由重さんと芝田進午さんは両方とも平和運動の活動家になりました。古在さんは特に反核問題に取り組み、原水禁運動で活躍されました。芝田進午さんはかつて『人間性と人格の理論』(青木書店、1961年)という本で、マルクス主義の未来が全面的にあるかのように描き、人類万々歳になると書いていました。しかし、ソ連を見に行き

これはだめだと思ったわけです。そこでどうしたかと言うと、公的には決してマルクス主義に対する批判はやらないで、平和問題と反核問題を闘いぬくことがわれわれの最大の課題だとして、そこで哲学的な問題に蓋をしちゃったんです。もう一人代表的な人は島田豊さんですが、この三人が私がとても親しくなった人たちで、この人たちとの関係が一方にありました。私は芝田さんに言ったことがあります、「芝田先生がいらっしゃったおかげで、私はスターリン全集を一回も読まなくてすんだから良かったです」と。あの世代の人はみんな読んでいましたからね。私はスターリンの論文はほとんど読んでいませんでした。

そしてもう一つの側の、先に述べた若手の人たちとのつながりは重要でした。それまでの世代が党派闘争とかイデオロギー闘争で喧嘩ばかりやっていたことにうんざりして、主張の正しさによって分裂したり批判し合ったりすることは根本的に問題が多いという態度を明確にもっていた集団がありました。石井伸男さん、吉田傑俊さん、吉田千秋さんといった人たちで、改革派としての民主的精神は非常に立派だったですね。この人たちが、スターリンは問題だと本気で思った少し上の世代の人たちといっしょに、何とかセクト的にならない唯物論研究協会を作らなきゃいけないということで話し合い、私は一番年下の者として参加しました。その時一番意見が近かったのは島田豊さんでしたが、私は「唯物論研究協会」という名前はおかしいんじゃないかと思っていて、そのことも実際にしゃべっていました。現実に対して批判的に考えるということを「唯物論」に収斂させるのは問題があるんじゃないかとしゃべったんです。でも、それは圧倒的に少数派でした。歴史的経緯でいうと、70年代の同じ頃に若手哲学ゼミというグループと全国唯研ができて、政治的イデオロギー色から自由な集団としての研究グループが成立しました。この点がその時代に非常に特徴的でした。多くの人たちはマルクス主義に非常に強い関心をもっていたし、弁証法的唯物論に熱中していた人もいっぱいいましたが、中心になっている特徴は、党派闘争になるような理論的グループになってはいけないという信念だったんです。中には、政治的イデオロギーに基づいて、多様な研究や思考の

あり方に対してはいつでも修正主義とか偏っていると
いった考え方をもち人たちも、唯研の中でも、3割前
後はいたという印象です。私はそういうことに興味が
なかったの、他の人たちを修正主義などという意見
に反対して言いたいことを言うと、守ってくれる人た
ちが少なからずいて、その人たちは私が言っているこ
とを攻撃しようという観念が全くなかったの、私はこの
研究組織ならいられると思っていました。人間って、
自分が思っていることを言って攻撃される所より、自
分の思っていることを言っても受け入れてくれる所
の方がいいに決まっているじゃないですか。そういう過
程が一つの前提にあったわけです。

それからちよつと話を戻しますが、私はいわゆる弁
証法的唯物論とかマルクス主義ということに強く興味
をもっていたというよりは、あえてその時代の言葉を使
えば、民主主義というものが実体をもつ思想でなきゃ
いけないという考えをもっていたんです。私について
若い人たちが「先生、ハンナ・アーレントのことを尊敬
していて、愛していますよね」と言うから、「ええっ、全
然違う。アーレントは僕と趣味が合う人じゃないの」と
いつも言っています。私が心の底から尊敬していた
人は、デイドロと中江兆民なんです。デイドロは私にと
って非常に重要な人で、あの人は編集者として生き
た人ですね。最初に『盲人書簡』というのを書いて弾
圧され、「もう二度と監獄で暮らしたくない」という理由
で、フランスでは自分の本を出版しなかった。それで、
ヴォルテールだとかルソーだとかあのへんの思想家
や科学者を集めて百科事典を作ることに専心したわ
けです。私はデイドロという人の生き方に深い感銘を
受けました。その一つに、ソクラテスじゃないですけど、
文化というものは協同で作るもので、一人の体系的
著作を残すことに熱中するのは愚かだということがあ
ります。だから若い時から、本を作るとすれば協同で
作ろうというふうに思っていました。社会的にみなさん
が私に興味をもってくれるようになった一番大きなき
っかけの一つは、『喫茶店のソクラテス』(汐文社、
1984年)という本でした。この本を作った時も、やはり、
あえて言うと、みんなで一緒に考えながら本を作ると
いう作業なら私はしたいと思っていました。実を言うと
かなり長い間、自分一人で本を書くのは良くないとい

う固い決意がありましたね。比較的早いもので一人で
作ったものは『くらしのなかの民主主義』(部落問題研
究所、1990年)という本ですけど、これは本じゃない
んです。当時の部落問題の雑誌に十数回連続のエ
ッセイを書いてくれと言われて、それを書いたら、好
評だから是非本にしてくれと言われて本にしたん
です。だから、私が自分一人で本を書くようになったの
はずいぶん後だというのが一つです。

もう一つは、私の最初の出発点と関係していて、こ
れは古在さんの影響だと思うんですけど、それからマ
ルクスも言っているけど、理論は民衆をつかまないと
意味がないという考えがあつて、民衆に読んでもら
える本を書かないといけないという思いがありました。古
在さんの言葉ですが、「本を読み上げて理解できな
いような本は作るな」と言われたんです。私はそれを
非常に強く心の中で思ってきました。そういう意味で
言うと、私の理論的な活動のほとんどについて東大
の哲学科の人たちは、ハンナ・アーレント以外のこと
は私が哲学的な仕事をしていると思っていない。アー
レントの仕事は最初のうち哲学じゃないと見なされて
いて、突然有名になってからアーレントが哲学に入る
ようになったわけですから、私は完全にアウトサイダ
ーでした。それがどうしてなのかと考えた時に、一つ
忘れられないのは、斎藤忍随さんという人で、岩波新
書に『プラトン』(1972年)という本があつて、とても苦
労した立派な人でしたが、私に二つ良いことを言っ
てくれました。「佐藤くん、人生に無駄飯は一つもない」
と、もう一つは「おしめの匂いのするような哲学をや
っちゃいけないよ」という言葉です。前者は全面的に受
け入れ、後者は、じゃあ私はおしめの匂いのする哲
学をやろうと決めたんです(笑)。つまり、私の場合、ど
ちらかという哲学的真理を科学的に解明することに対
する関心がないので、今の時代に関わっている問題
をどのように他の人たちに提案できるかということとし
て、哲学的営みをやってきたんです。

ちょうどその頃、東ドイツを中心として西欧型マルク
ス主義の人たちが「実践的唯物論」という問題をしゃ
べり始めて、プラクシス・グループとかいろいろありま
した。「実践的唯物論」というのは極端に言うと、唯物
論の方は大した力点ではなくて、科学的精神に基づ

いて物事を判断することを尊重する精神に他ならないと私は見ている。「実践的」という方は、今現在において問題になっている課題に対して考えることだという捉え方をしていました。そういう意味で言うと、私がいろいろものを考える時の出発点には、古在由重さんと芝田進午さんがいて、スターリン主義哲学およびスターリンのマルクス主義に対する失望と絶望をはっきりと二人は示したけれど、社会に対しては一言も言わなかったということが一方にありました。それと、民衆に通じる言葉で考えたり問題を提起するべきだという考えがあって、その二つが大きかったです。

それから、79年12月が私の転機になりました。ソ連がアフガニスタンに侵入したことです。それまで社会主義に対して肯定的に捉えていましたが、戦争と侵略をする国やそれを批判しない社会主義を応援する気持ちを全部失ったんです。それ以降、イデオロギーとか体系的理論を信用しなくなりました。その時に読んだのが小田実さんの『歴史の転換のなかで』（岩波新書、1980年）という本で、とても深く感動しました。イデオロギーによって物事を考えるのではなくて、現実の歴史の転換をきちんと捉えていくことが一番重要だと思えるようになりました。そういうことをしゃべった時期が数年間あるんですが、それが終わるとしばらくは哲学的論文は書いていないはずなんです。

ところが82年か83年くらいに、アーレントの『精神の生活』を偶然読んだんです。それで人生が変わりました。82年に千葉大学に就職してすぐ、教員という仕事は比較的自分に合った仕事だと思うけど、哲学者としては不適格だと思って、弁護士になろうと思ったことがありました。けれども、アーレントに出会って、こんな面白い人がいるのだと思ったんです。不遜な言い方ですが、私と意見や発想は違うけれど、自分よりずっと物事を深く見ていると思いました。自分が納得できない部分、気に入らない部分があるとすると、私が本当には見てない部分を彼女が見ているからかもしれない。とことんまで調べてやっぱり納得できないなら拒絶する、でも、その議論は分からないからということで拒絶することは決してやるまいという決意でアーレントと付き合い始めたんです。80年代の半ばくらいから、いろんな所でアーレントのことはちょびちょび

書きました。日本でアーレントは、学生運動の後、70年前後に一回流行しましたが、それ以降は社会から消えていました。私が熱中し始めた頃、フェミニズムの人たちの所で「私はアーレントを研究しています」と言っても、知っている人はほとんどいなかったですね。ところが95年にウィーンに行った時に、有名なフェミニストがフェミニズムの議論をやるにあたってアーレントについて演説するんですよ。日本とは全然違う文化だと非常に印象的でした。

別のエピソードで言うと、87年に岩波書店からマルクス主義的な本を翻訳しないかという提案があって、私は読んでみて感心しなかったからやめておきますと言ったんです。それで編集者が「それでは、どんな本だったらおやりになりたいんですか」と言うから、本当にやりたかったので「アーレントの『精神の生活』を訳したい」と答えたら、この人はよく知らなくて、「それでは編集部で検討させていただきます」とのことでした。そうしたら、韓国の強権的軍事的弾圧と戦いながら、実は、アーレント研究者でもあったT・K生(池明観)といっしょにやっていた当時の編集長がそれはいいと言って、即座に決まったんです。そこで編集者が、編集長もいいと言っているし、丸山眞男先生も立派な人だと言っているようですから結構でございます、ということになりました。しかし、上巻、つまり「第1部 思考」の文章は分かるけれど、下巻(「第2部 意志」)は頭から分からない。これをちゃんと読んで訳にふさわしいものにするにはどうしたらいいんだろうと、翻訳するのに結局7年かかったんですよ。それがかえってプラスになりました。

なぜかと言うと、89年にベルリンの壁が落ちて、世界の西側の理論家たちが、現代の問題の中核は東西冷戦の問題じゃないんだという経験をし、冷戦以前にぶつかっている問題を考えるとアーレントが深い問題提起をしていると、フランスの人たちが最初に騒ぎ立てた、哲学的に言うとね。政治学的にはアーレントは、アメリカで一貫して政治理論家として高い評価を得ていましたが、哲学の人たちが一斉に興味をもったのはフランスの思想家からですね。日本は、ハイデガーやハーバーマスを除けば、最新の流行をフランスから輸入することが多かったんですよ。その時に、

高橋哲哉さんとか鶴飼哲さんとかがアーレントは面白いと言い始めて、それでみんながしゃべり始めたでしょう。その時に、筑摩から『人間の条件』が文庫本で出たんです(志水訳、1994年)、『精神の生活』も94年ですから、ほとんど同じ時期でした。

しかし、この『精神の生活』の難解さは尋常ではない。だから売れるわけないと見なして、6500円の二巻本、当時としてはとんでもない高い本として出版されたのです。ところが、全く意外なことにあっという間に売れちゃったんです。それで何でこんなことになったのかということになって、次第に哲学科の先生たちも面白い人だと言うようになりました。ただ、唯研の人は、長い間、言わなかった。いち早く好意的に話してくれたのは石井伸男さんくらいで(芝田進午さんも古在由重さんも肯定的にとらえてくれました)、唯研関係者の大半は、アーレントというのはどちらかと言うと反共的立場からマルクスを批判する変わった理論家だという認識を超えることはほとんどなかったですね。そんなわけで私は、それから後は、自分のやっていることが社会の中で拒絶されなくなっていると思いました。

一方では、私の活動としては、相変わらず『喫茶店のソクラテス』に属するもの、とくにジェンダーに関わる問題を取り上げました。ただジェンダーに関して、私は理論家ではなく実践家でした。江原由美子さんとかその他理論家たちのジェンダー理論を読んではいったけど、深い共感はしていなかった。今のLGBTQとか、女性差別に関わる問題が中心の関心だったんです。唯研の人たちがどれくらいご存じなのか知らないけれど、私の中で一番長く実践運動をやったのはジェンダー問題なんです。日教組(日本教職員組合)で「両性の自立と平等をめざす教育研究会」の助言者を27年間やったのがその代表だと思います。私はかなりの時間をその運動に使って、大学の授業がとても忙しい位置にいたので、理論はもういい、そんなに大したことはできなくてもアーレントという偉い人のことが分かればいいというくらいのつもりでいました。

その後、2000年が転換点になりました。その年に『女たちの近代批判』(青木書店、2001年)という本を書きましたが、2000年に海外研修でアメリカに行った

時、オクラホマで固い決意をしたんです、近代を総力で批判しようと。しかし、そうすると、友人の理論家たちみんなを敵に回さなきゃいけない。そうしてでも私はその議論をやっていくしかないという考えになっていきました。マルクス主義というのは、建前としては近代以降を目指しているけれど、理論としてはやはり近代理論なんですね。その点で言うと、アーレントの議論を肯定的に受け入れてくれた人は唯研の中で本当に少なかったです。ただ、アーレントが世界的に注目されるようになったのはなぜなのかという問題抜きにその議論はできないと思います。やはりマルクス主義に対する信用も落ちていたことは間違いなくて、社会主義運動を何とか応援したいと思う人たちはたくさんいるだろうけれど、理論としてのマルクス主義が創造的な理論だという考えをもつ人たちは非常に少なくなっていたんじゃないですかね。それでだんだんアーレントに対する興味が唯研の中でも出てきて、小山さんもその一人かもしれませんが、毎年、大会の研究発表でアーレントの研究が必ず出るくらいの時代になりましたよね。どちらかと言うと今までは、誰にも認められないけれど私の納得した議論をやりたいと思っていたところが、いつの間にか肯定されるようになったので、自分が存在してもいいようになったのかという感じが率直なところですね。

ただし、アーレントと私の間には決定的な違いがあって、彼女はひどく難解な文章を書いていますね。なんでこんな難解な書き方をするんだろうという理論的関心がずっと私の中にあって、それはアーレントの生きた文化を抜きにしてはあり得ないと思います。雑談ですけど、85年に生まれて初めて東ドイツに行きました。これは運が良く、偶然の偶然が重なって、普通の人たちは共産党やどこかのコネをもたないと行けなかった時代です。そこで、89年にベルリンの壁を倒す運動の先頭に立った人たちと知り合ったんです。同時に忘れられないのは、東ベルリンに住むエルテルさんという女性のお世話になったことです。その人の夫は科学アカデミーの会長をやっていたんですが、早く亡くなられてシングルだったんです。そこで下宿させてもらい、何から何まで親切にお世話になり、東ドイツのひとびとの心優しい思いやりに深く感動しま

した。その下宿中、エルテルさんは二つ面白いことを言いました。2月に、ベルリンの壁を通過して初めての社会主義国に入るや、彼女の家に招いてくれてこう言ったんです、「佐藤さん、これから世の中が大きく動くかもしれませんよ。ゴルバチョフという人が出てきましたから、これで世の中変わるかもしれません」。日本ではブレジネフとゴルバチョフのどこが違うのかといったことはほとんど誰も知らなかったもので、それを聞いてすごく驚きました。もう一つは、「エルテルさん、東ドイツの労働者、庶民の人たちと接触してみたいので、教えてもらえませんか」と言ったら、その時に彼女は「ごめんなさい、私ね、労働者の人とあまり接したことがないの」と言ったんです。ええっと、非常に印象的でしたね。社会主義国を名乗る東ドイツはそういう社会構造をなしているのかと思いました。結局、アーレントなんかの付き合いも見れば見るほど、intellectual world ですよ。ドイツには intellectual world、mundus intelligibilis というのに対応するような文化があるんですよ。だから、自分の言語がそれよりも外の世界に話されることなんか想定もできなかったというのがアーレントの正直なところだし、当時の理論のあり方なんだろうと思っていますね。それが悪かったのか正しいことなのか、率直に言うと両方だと思います。一般に知的労働、知識人というグループに囲われがちな人と、いわゆる庶民と言われる人との関係がどうあるべきかという非常に根本的な問題を考えさせられました。アーレントは重要だという話はいろんな所で書いてはいたけれど、庶民、普通の市民の人にとって重要だということを知るように書けるという確信をもてるようになったのは、『〈政治〉の危機とアーレント』(大月書店、2017年)という本の4、5年前です。それまでは無理だったんです。

アーレント研究について言うと、確か99年ですかね、千葉眞さんと高橋哲哉さんと私の3人が中心になってアーレントの集まりをやりました。岩波から『精神の生活』を出したのと、千葉さんがアーレント研究者・政治学者として有名になったのがちょうど同じ頃で、川崎の市民アカデミーという所で講師をしていたら、千葉さんというアーレント研究者がいると気が付いたので、声をかけてみたんです。人徳もあって情熱も

ある立派な人です。それから加藤典洋さんと議論していた高橋哲哉さんとは、私が助手だった時に大学院生で付き合いがありました。それでアーレントの集まりをやろうということになり、大島かおりさん、岡野八代さん、矢野久美子さん、齋藤純一さんとか、集まったんです。ところが私が2000年にニューヨークに行くことになったので、私を抜いた形で科研費を申請しました。その時、アーレント学会を作ろうかという議論もしたんですが、私が抜けたこともあって、作るという方にはいきませんでした。

予めいただいた質問に対する話はここまでにして、後は必要に応じてお答えするというのでどうでしょう。

●今のお話について、もう少し詳しくお伺いしたいと思います。最初に教育を十分に受けない家庭で生まれ育ったとおっしゃいましたが、そのことと、大学に進学して当初は美学に関心があったこと、さらに性に関わるフェミニズムの議論に興味があるということ、このあたりのつながりがありますか。

私の親は芸術教育も一切何も与えなかったんです。自分ももつといい家に生まれれば良かったのにと考えたことの一つに、本を読むという文化が全くなかったことがあります。だから、自発的に本を読み始めたのは16、7歳でした。にもかかわらず12歳頃から、芸術的なものに非常に深く感動を受けるようになりました。私は進学校に行ったんですが、音楽の先生が「どうせおまえたちは音楽なんて真面目にやる気がないんだろう、何でもいから俺がかける音楽でも聞いている」と言って、かけたのがベートーベンの「運命」でした。最初の2分くらいで「何だ、これは」と思って、「先生、これは圧倒的な音楽ですね、後何分くらい続くんですか」と聞いたら、「まだ第1楽章しか終わってない」と言われ、驚きあきれたということがありました。こういう感受性については、私の母親が私を非常に愛してくれたことと深い関係があって、彼女は人間の情緒を大事にしていたと思いますね。人間って、本当に自分の情緒を大事にすることが保障されている空間で育つかどうかということが決定的に大きいような気がします。彼女がたとえば、鳥が一羽死んでいくのを涙を

流して「ああ、死んじゃうよ」というのを見ていた経験とか、夫婦喧嘩をやって負けそうになると、いつも思い出すんですが、「何言ってるの、私だって人間よ」と言っていたこととかです(笑)。小学校5年生の時には、後にパートナーとなる女の子を1年生の時から好きだったんですが、「和ちゃん、座りなさい。女の人はね、愛するということは真剣なんだから、あなた、いい加減に人を愛しちゃいけないよ」なんて、訳の分からないことをいろいろ教育されました。そう考えると、いわゆる情操教育というのがあったんだと思います。やはり感覚で受ける苦痛や打撃が多ければ、そこどころが広がらないと思いますよね。あえて言うと、人間どうし感情的に共有し合って支え合っていけるようなことを経験させてくれたという意味で、私の母親は大きかったと思います。

●佐藤さんの思想形成でデイドロと中江兆民の影響が大きかったということですが、具体的にどんな形で出会ったのですか。

まず中江兆民については、リフトンという人と一緒に書いた加藤周一の『日本人の死生観 上・下』(岩波新書、1977年)というとてもいい本があって、日本の代表的な知識人、たとえば森鷗外、正宗白鳥、河上肇といった人たちの死に方について書いた本ですが、そこで中江兆民のことも書いていて、素晴らしく面白い文章でした。私はどちらかと言うと、日本人というのは怨念とじめじめとした情念に浸った文化に生きていて、たとえば藤圭子の「夢は夜ひらく」(1970年のヒット曲)という世界、演歌のメンタリティが日本人だと思っていたんです。そうしたら中江兆民は豪放磊落ということを象徴するあらゆる意味で自由な人で、しかもご存じのように「東洋のルソー」と言われた人ですから、読んでいて思想的にも何て面白い人だろうと思いました。私は、場合によっては歴史学をやろうと思っていたこともありましたが、私の恩師にあたる人の先祖が自由民権運動の秩父事件の首謀者の一人で、網走の開拓工事で殺されたということもあり、また自由民権運動100周年で、そういう話を70年代から聞いていました。その理論的背景であった中江兆民に

魅入られたんです。一番魅入られたのは彼の『続一年有半』です。「釈迦耶穌の精魂は滅してすでに久しきも、路上の馬糞は世界と共に悠久である」という言葉を聞いて、何て面白いことを言う人だろうと思ったんです。

デイドロは明白です。私はもともと美学をやりたかったので、最初ルカーチの研究をしました。しかし、ルカーチは、アーレントと違って、本当に独創的な理論ではなかったです、私にとっては。心を打たなかったんです。あの時代、哲学科で生き残るためには、マルクスとかマルクス主義なんていうことに興味をもっている人は容れられませんでした。それで多くの人たちはヘーゲルを研究しました。因みに、私の卒業論文は「ヘーゲルにおける言い表せぬもの」、修士論文は「ヘーゲルにおける個性 Individualität について」でした、私の関心が少し現われていると思っています。それでヘーゲルの『精神現象学』を熟読した時に、「VI 精神」の最初の所でデイドロが出てくるんですよ。要するに、疎外にあたる概念のことをしゃべっているのがデイドロだと。それから、小場瀬卓三さんという都立大学の先生がデイドロに関する本を書いていて、それを読んでデイドロは何て精神の躍動する魅力的な人だろうと思ったんです。この人のように生きたいなと、ロールモデルくらいに興味をもちました。実際、私は、70年代の終わりから80年代の頃、フランス啓蒙思想の研究をしました。だけど、啓蒙思想は思想として書くのが大変なんですよ。イデオロギーとして、文化運動としては描けるけれど、思想として書くのはとても難しい。デイドロは天才的な要素があったから、私をもっと創造性のある人なら書けるかもしれないけれど、私には書けないと思ったんですね。それが、大学の教師、研究者を辞めようかとも思ったもう一つの理由でした。

●もともと哲学科に行くつもりはなかったということですが、当時たとえば「ハイデッガーは最も悪しき意味で哲学的であった」と書いておられました(「哲学の根本問題と現代の課題」、社会科学研究セミナー『社会科学研究年報5』、1981年)。一方で、アーレントにも関係しますが、思想という言い方もされていて、そこ

に微妙な境界線があるのかなという感じも受けたんですが。

境界線というよりは、哲学に対してほとんど拒否反応がありました。ハイデガーの場合、思想としては他者なき思想というのが多分正しいと思うんですよ。他者なき思想というものの創造力がどれほど偉大であったとしても、私は感心しませんでした。アーレントは、結局、生涯をかけて、ハイデガーのような他者なき内在的思考と、政治的思考とがどういう関係であり得るのかを探ったんだと私は思います。もう一つ率直に言うと、私の出発点にもなっていることですが、西田幾多郎をはじめとした京都学派の人たちの多くが、結果的には戦争肯定になっていったことをどう考えたらいいのかという問題が私の中にありました。唯物論研究会の中にもそういう人たちがいたんですね。思想、あるいは哲学的思考で、全体主義や戦争とつながるような思考を私は受け入れるわけにはいかないというのが、イデオロギー的信念です。そういう思考形態を私は拒否するという思いがかなり強かったです。

それから、アーレント『精神の生活』の 1 ページ目に参ったんです。精神の生活について話をしようとすると、哲学者の研究のように見えるけど、自分は決して哲学の専門家ではないし、哲学者と呼ばれたくもないというところからこの本が始まるということに、この人は何て魅力的な人だろうと思いました(「私は『哲学者』だという気はないし、また、『哲学者』でありたいというわけでもない...」(佐藤訳『精神の生活(上)』、岩波書店、p.5)。それでいて、人間の思考とは何かということこれから研究するというので、私にとっては、自分がやりたかったことを初めて正面から主題にしている人だと思ったんです。アーレントの、一方では引きこもって自分だけで考える思考の役割について位置付けつつ、結果的にはハイデガーのように現実に関わると突然ヒトラー万歳をしゃべってしまうような思考にならない思考のあり方が可能なんだろうかという問題意識は、私の潜在的な問題意識をまさに表現してくれていたのではないかと思います。

●佐藤さんが学生の頃は、フランスやアメリカをはじめ

め世界的に、また日本でも全国的に学生運動が高揚した時代でした。東大も例外ではなく、いわゆる「東大闘争」の時代でしたね。こうした学生運動への関わりについてお話しいただけますか。

私は、1 年生の後期から駒場(東大教養学部)自治会の常任委員をやりました。私のクラスはとても議論が盛んで、活動も盛んでした。一番覚えているのは、「エンタープライズ事件」(1968 年 1 月の米軍原子力空母「エンタープライズ」の佐世保寄港に対する全国的な反対運動)に対して、クラスで決議し、私がカンパをもらって各駅停車で佐世保まで行って帰って来たことです。しかも、きつい話で、クラス決議で行ったんだからこの党派にも加わるなと言われ、ただ電車に乗って来ただけでした(笑)。歴史的な偶然ですが、私は民青系と中核系の両方に深い関わりをもっていて、両方から胡散臭く思われていました、あいつはあっちの方とも関わっているみたいだと。ところが運動としては、非暴力が私の中で重要な部分でした。これも最近になってそういうふうには認定されていなかったことに驚いたんですが、佐藤優・池上彰『激動日本左翼史』(講談社現代新書、2021 年)で、共産党がいかにも暴力的だったかということを経験してはいけなと書かれていましたね。この間、本を書くために加藤典洋さんとか細かく読んでみました。あの人は革マル派に共感していた人で、それが破綻して動いた人ですけど、駒場に関しては、明確にある時期までは暴力的な要素はありませんでした。ところが 68 年の 11 月に、初めて東大の駒場に来た学外の革マル派が、民青系の集会だったと思うんですが、突然、鉄パイプで殴りかかったんです。私はその集会に参加していませんでしたが、驚いて「それはない、止めろよ」と言ったら、一発目が木材で頭を殴られ、二発目は鉄パイプで肩を殴られました。鉄パイプの方が痛かった、あまりの痛さでした。それで「佐藤、大丈夫か」と言われ、「何が?」と言ったら、「おまえ、体中血だらけだぞ」といわれ、大量出血していたのに気づいたのですが、本当に死にかかったんです。それから 1 か月間、脳内出血のため全くベッドから動いちゃいけないことになりました。そのため結果的に、68 年 11 月にはかな

り学生運動が盛んになっていましたが、私はその時から完全に引退なんです、傍観者なんです。それでやることもないし、仕方ないからフランス語でもやるかというのが、学問をやろうと思ったきっかけだったのかな、革マル派が私の人生を決めたんですかね(笑)。その後、全共闘と民青系の人たちの殴り合いとかあったわけですが、私は当事者としての実感をもってはいないんです。安田講堂の時は(1968年に全共闘が東大安田講堂を占拠したことから起きた事件)、機動隊が催涙弾を撃っている所の横を歩きながら見ていましたよ。私は良い意味でも悪い意味でも積極的に関われないということが分かっていたので、責任の取りようもなく、傍観者になっていました。だから、文学部に行った時、それこそ加藤典洋さんみたいな人は授業に出るなんてことは自分の信条に反するという苦しみをもったわけですが、私の場合は全然何とも思わないで、勉強に入ったという感じでした。

●学生運動への関わり、あるいはそれを見ていたことが、佐藤さんの思想形成に何か影響があったんでしょうか。

一番大きいのは非暴力の問題です。だって私は死にかかったんですよ。何であんな馬鹿気たことをやるんだろうと思ったんです。その後かなり長い期間にわたって、科研費も取って暴力問題について研究しました。たとえば、J.ギリガン『男が暴力をふるうのはなぜか』(大月書店、2011年)という翻訳書もしました。彼はキャロル・ギリガンの夫で、私は日本人としてはキャロル・ギリガンと親しく何日も暮らした珍しい経験をしました。ただ、この翻訳書は内容はいい本で、朝日新聞でも取り上げられたんですが、これが出たちょうどその時に東日本大震災と原発事故が起こって、日本中の人がある問題に行っちゃった。それで残念ながら、この翻訳書の話は消えてしまいました。ともかく、暴力問題は私の中ではとても重要な問題です。アーレントにとっても暴力問題はとても重要じゃないですか。たとえば、東大闘争中に三島由紀夫と全共闘の人たちがやり合いましたよ(1969年5月)。今の若い人たちは「あの時の議論は面白いですね。佐

藤先生、ご覧になったんでしょ」と言いますが、三島は、暴力は場合によっては必要だという点で全共闘の諸君と一致するからと言ってあの会をやったので、私はそれに強く反発して、死んでも行くものかと思いましたね。

●その後、哲学科の助手を経て千葉大学に就職されたわけですが、佐藤さんが長らく仕事をされてきた大学のあり方が、学生運動鎮圧のための大学管理法(「大学の運営に関する臨時措置法」1969-2001年)とか、東京教育大学を解体して新構想大学を設立するための筑波大学法(1973年)などを経て、大きく変わってきました。そのことについて、大学教員生活を通してどんなふうにお考えでしたか。

一つは、私の生涯の恩師の一人である古在由重さんから「佐藤さんね、大学の管理運営には関わらない方がいいですよ」と言われ、これはかなりきちんと守りました。それは正しい判断だったと個人的には思っています(笑)。千葉大学の教養部の時も、教育学部の時も、すぐに管理運営の仕事の声がかかったんです。教養部の時は「私、本が書きたいので、研究したいので、もうちょっと待ってくれませんか」と言って、若桑みどりさんから何てエゴイスティックなという顔をされましたが、その時は子育てしながら仕事をして本当に忙しくて、そのうえ管理運営の仕事をやったら自分の研究ができないという思いがありました。教育学部に移った時も、学部長がすぐに私を全学の委員にしました。でも任期2年後に、みんな私が引き続きやると思っていたようですが、事務の人に「これってやらなきゃいけないんですか」と聞いたら、「いや別に先生のご意向で」と言うので、「それじゃ辞めます」と言いました。学部長は怒りましたね。それで私は追放された、あいつは使えない奴だと。

今の話は雑談ですけど、もう一つ非常に重要な本質的問題は、やはり国立大学の独立行政法人化(2004年)ですね。私は最初千葉大学教養部にいたんですけど、東大の駒場(教養学部)とほとんど同じで、本当にリベラルで自由に議論し、官僚的な要素がありませんでした。でもご存じのように、文科省は教

養部を潰すことを決めていました。独立行政法人化は最初どういうふう宣伝されていたかと言うと、これからは文科省が全部決めたことに従って大学が組織運営や改革をやるのではなく、各大学が自主性を生かせるとてもいいシステムになりますと言って、それをみんなが信じたんです。そうしたら実は全くの嘘で、文科省からの交付金は減らしていきますし、金回りは私たち文科省が全部握ります。しかし、皆さんが決めた改革案のうち私たちが一番いいと思っているものに合うか、私たちが期待している以上にいいものには金を出す、私たちの意向に沿わないものは全部断るといのが独立行政法人化なんです。しかも、教員たちがさんざん苦労して作った改革案も断る時にはあまりたいした理由を言わないであっさり拒絶する。学部の先生たちはみんなね、お互い利害が対立しているところで必死に妥協をして何とか合意を取るでしょ、それが一日でぱっと拒絶されるからみんな改革意欲が失せていくんですよ。自分たちがいくら頑張ったって、どうせ大学側は受け止めてくれるわけじゃないかといか。

独立行政法人化以降の動きに対して、一切組織改編の計画には関わりませんでした。そのためか、私は一番大変な時は、一週間で12コマくらい授業をもっていました、そんなことあり得ないでしょ。なぜかと言うと、教育学部もいろいろ組織改編されて生涯教育課程や異文化コミュニケーション専攻とかいう新しいコースが作られました。その度ごとに、他に回せる人員がないところで「佐藤先生やって、佐藤先生やって」とか言われ、私は同時に3セクションの教員をやったんですよ。だから1週間12コマになっちゃったわけです。その内部での改善には、学生との関係がよりよくなるように努力はしたけど、組織改革に関しては一切信用していなかったです。今はみんな認めると思うけど、独立行政法人化は日本の学問研究の破壊だと固く信じていました。

●最初の方で詳しくお話しいただいた唯研について伺います。創立当時から哲学以外の分野の研究者も参加していたとおっしゃいましたが、その後唯研はずいぶん変わってきて、マルクス主義哲学をベース

としない研究者も広く受け入れるようになりました。実は私藤谷もそうですし、ずっと若い小山さんもそうだと思いますが、そのへんの変化をどのようにお考えですか。

そうですね。小山さんのような人が唯研に入るようになったのはずっと後の段階です。創立当時は、教育学者や社会学者も個別的には参加していましたが、哲学が中心であったことは間違いありません。ただし、先ほど私が話したような哲学的な営みをやるべきだという考えの人と、弁証法的唯物論を基礎にした研究をもっとやるべきだという人がいて、私のようなやり方は哲学の王道を外れる行為だと見なしている人たちがいたことは事実です。

私自身、唯研を変えていくためにそれなりに努力したつもりです。私は何回も「唯物論研究協会」という名前を変えるべきだと交渉したんですけど、名前を変えるのは思想的逸脱だと考える人もいっぱいいたので、無理でした。組織の名前を変えるということになると、組織の中でそこにアイデンティティをもっている人たちが何十パーセントかいるわけですよ。その人たちが追い出すということでもない限りは、何でそんなことを言うんだと言われるでしょう。ただ、私が委員長になった頃(2002-2004年)は、唯物論の研究を原理、中心にするような規約にするべきじゃない、諸科学や諸運動の共同の土台となるべきだという考えが割合受け入れられていました。だからその頃、唯物論やマルクス主義と関係ない人たちにもずいぶん会員になってもらったのです。最初に言ったように、自分の考えが唯研の主流の考え方とは一致しないということがいつもありましたが、唯研の主流は、私の世代でいうと後藤道夫さんのような考え方でした。だけど、変な言い方ですが後藤さんが狭い意味での哲学者ではないということもあって、積極的に諸科学の研究者の結合体になるべきだという考えが受け入れられていました。そういう意味で、私の頃は一番やりやすかったです。あらゆる意見の違いのある人でも、参加しようという人を入れようという運動になっていったので、私の委員長時代、組織を変える必要はなく、何もなくて良かったんです。こうして会員もかなり増えて

いきました。ただ、このままではうまくいかなくなるという問題を私は何回も提起しました。「唯物論研究協会」という名前のままだと先細りになるけど、それでもいいのですかと。でも、これについて大半の人は、先細りになろうと名前を変えるわけにはいかないという思いをもっていましたね。

●今のお話とは少し文脈が別になりますが、「唯物論」ということについては、マルクスに限らず、古代ギリシャ以来の伝統があると思うんです。先ほど出されたデイドロにしても中江兆民にしても、唯物論の系統ですよ。『唯物論』自体について佐藤さんはどんなふうに捉えていらっしゃるんですか。

冗談ぽく言うと、アーレントの *amor mundi*(世界への愛)、世界を愛するという行為や態度が唯物論だと思います。つまり、この世に肉体も含めた存在として他者と協同しながら生きるということを思考の原点に置き、そこを積極的に位置付けようというのが唯物論だと思います。だから、エピクロス主義とかヘドニズムとかいう現世肯定の思想運動、18世紀の唯物論があるじゃないですか、ああいう思想は私の一方の原理です。

●逆に言うと、世界への憎悪だとか他者を排除することをベースにしている思想は、唯物論と相容れないということですね。先ほどハイデガーの名前も上がりましたが。

そうですね。だから、レーニンがしゃべったような唯物論とそうでないものの基準とか、物質の客観的実在とか、そんなのは科学者だっただいたい認めていると私は思っていて、何を今更大げさにしゃべることなのかというのが率直な私の思いでした。

●それから、佐藤さんの思想で大きく焦点が当てられているのは、こちらで勝手に整理したんですが、一つがマルクス主義的な資本主義批判とは違った視点からの近代批判、もう一つがセクシュアリティとかジェンダーなど「性」に関わる問題、そして三番目が

ハンナ・アーレントの再評価、マルクスに対するアーレントの批判も含めた再評価だと思います。ただ、自分の思想をそんなふうに整理されると困るのであれば、おっしゃっていただけますか。それから、「性」をめぐる問題については、先ほど理論ではなく実践してきたと言われましたが、理論的な問題としても近代批判やアーレントの議論とつながっていると思うんです。そのへんのつながりについてもう少し展開していただければと思います。

私の場合、何とも不思議な経過で、小学校1年生の時に一目惚れして、23歳で結婚し、24歳で子どもが生まれました。しかもパートナーは三交代がある看護師のような仕事なので、生命再生産というか家事・育児、さつき「おしめの匂いのする哲学」と言っただけで、それを抜きにした理論というものについては一切受け入れられなかったです。私は自分の母親を見ていて、それから自分自身が父親になって、人類の営みで最も大変なことは家事・育児、つまり、生命を再生産する行為だと思いました。こんな人類の一番大変なことを、何で学校の教科書で1ページ目に書いていないのかというのが、私の反発でした。マルクスは生命とか生活という議論を最初に理論として立てたけど、それ以降は率直に言って家族も子どもを産み育てることもほとんどテーマにしていなかったですね。それではだめでしょと本気で思ったんです。このことを、近代全体を批判しようと決意した私の転換点になった『女たちの近代批判』(青木書店、2001年)にも書きました。この本は一生懸命書いた本なんだけど、ほとんど関心を引かれなくて、一生懸命書いた本が売れる保障はないことの代表ですね。男の人が読まないのは仕方ないとは思ったけど、女の人たちが、大杉栄のことを言った瞬間にみんな「佐藤さん、だめ」と言って、そこで思考停止することに驚きました。フェミニストのうち、性の問題を正面から考えながらも政治経済の問題を考える人というのは、非常に少ないです。

マルクス主義では家事・育児、生命を産み育てる行為の問題の位置付けができていない。マルクス主義フェミニズムがそれを問題にして位置付けようとし

ているということにはなっているわけですね。確かにマルクスがそれを見ていなかったんじゃないかというマルクス主義フェミニズムの批判は正しいと思います。ただそういう人たちも、その問題と文化や哲学の問題とをどう絡み合わせて考えるかということをやっていたかというのが、私の印象です。近代批判という際には、やはり、家事・育児に関わる問題をきちんと位置付ける必要があると思います。それから近代がもっている大衆社会的構造、つまり全てが消費や政治権力の確保をめぐる争いになっているような文化の構造が問題だという批判、それがマルクス主義の中にどれくらいあったかと言うと疑問です。90年代までのかなりのマルクス主義の議論は、経済構造を変えることが一番重要だという議論に還元されていたと私は思っています。

先ほど説明しなかったんですが、私が大学教員として一番我がまをやらせてもらったことは、在職中に3回海外で研修したことです。さんざん嫌味を言われましたが、とても重要な経験でした。その経験から、日本の議論は本当に自由論を基礎に置いていないと思いましたね。アーレントはやはり自由論が中核じゃないですか。その意味で言うと、近代批判という時に、経済学的に規定された社会の批判ということで、所詮それをより合理的に革命的に変えれば良いという議論では済まないという問題意識がはっきりありました。

それから性の問題について言うと、本当に私は女性をコミュニケーションパートナーとして好きなんです。女の人の問題を軽く考えることが分らないです。しかもセックスだけでなく、精神的にとっても重要な存在です。精神的にとっても重要な存在である女の人の関係を、セクシュアルな問題を介しつつも、どう位置付けるかというのがずっと大きな関心です。最近やっと、身体と精神の社会的関係について、これでいいかなというある種の仮説ができるようになってきました。私は美学をやりたかったと言いましたが、Aisthesis(感覚・知覚)論を結局やりたかった。人間にとって感覚というものがどういう意味をもつのか、それと精神の関係がどういう意味をもつのかということでした。最近、東京工業大学の伊藤亜紗さんという人が、感覚が精

神に与える影響をとことんまで研究していて、脳科学・認知科学の研究が進んだことと結びつけていてすごく面白い議論をやるようになっていきます。40年ほど前にそれが可能だったら、私もこんなことをやっていたかもしれません。性の問題というのは、性にほとんど人間の精神性と身体性の関係が現れているという意味で、一貫して考えたかったんです。それからみなさんよくご存じのように、性のことを正面から書こうとすると、私は覚悟していましたが、フロイトのような書き方でない限りは、社会からは軽蔑を含んだまなざしを受け、相手にされないと思っていましたね。私としては、性の問題は一番重要な問題としてずっと存在し続けています。でも、いい時代になったと思うのは、女の人と話し合うと、この議論を物おじしないで話す人が大分出てきましたね。男の人は相変わらずしゃべる人は少ないですが。

アーレントの再評価という言い方はよく分かりません。ただ私が人生で出会った中で一番大きなものだったので、それがたまたま時代の流れと合ったらこうなっただけの話です。私のアーレントに対する関心に関連して言うと、『ラディカルに哲学する1・2・3』(大月書店、1994～95年)というシリーズ本の企画が91、2年から始まりました。その時に斎藤茂男さんというジャーナリスト、『妻たちの思秋期』(共同通信社、1982年)などを書いていた優れた時代感覚をもった立派な人ですが、その人が私と後藤道夫さんの前で言ったんです。「民衆のための社会を作ると言っていた社会主義が、民衆から見捨てられたという問題を正面から考えてくださいよ」と言われて、私はそれを正面から受け止め、その通りだと思いました。アーレント研究の世界での話ですけど、カノヴァンという人の「アーレントはマルクスの矛盾した問題を探求しようと思って本気でマルクスを研究した結果として、『人間の条件』ができた」という説明を読んで、目を開かれたのです。そんなに本気なのかという思いで、『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』(大月書店、2002年)を翻訳しました。アーレントのマルクス批判を最初のうちは「何だい？」といささか否定的に読み始めましたが、ただ最初から刮目すべき人物だと思ったのは、マルクスを些末なところで批判していない点ですよ。マル

クスが非常に偉大だと唯物論研究者が言っているその当のポイントを批判しているんです。たとえば「実践」が重要だという、では「思考」はどうなるのかと問われるわけです。そういう問題、階級闘争や暴力の問題など全部を、根底から真正面から問おうとしているアーレントの姿勢に非常に考えさせられました。しかし、私はその考え方を最初から全部受け入れたわけでは全然ないんです。こういう言い方はちょっと無理だろうと思うことが多かったですね。そういう意味で言うと、齋藤茂男さんから言われた要請に応じて、アーレントがマルクスを批判しようとした意図をとことんまできちんと理解しようということが、私の中の大きな特徴だと思います。たとえば百木漠さんなんかの場合は、もともと経済学から出発していると思うんですが、アーレントの中心は経済ではなく政治ですね。政治という問題を正面から考えないと、本当のマルクスの批判にならないと思っています。結局、マルクスには統治は存在するけれど、政治がないです。

●少し戻りますが、『女たちの近代批判』など、マルクス主義とフェミニズムについて話されている時に、普通のマルクス主義に対する違和感というのがあったとおっしゃいました。ナンシー・フレイザーの“Capitalism”(Polity、2018年)という対話形式の本があって、佐藤さんと同じことを言っているなどと思って聞いたのが、マルクス主義フェミニズムとか社会主義フェミニズムでは、家父長制批判として、男性の労働の裏に女性の無償の再生産労働があるということについて、対話の相手が、その話をよくされていますよねと言ったら、フレイザーが、確かに言っている人はいるけど、マルクス主義という全体の中ではまだほとんど無視されている、マルクス主義研究の一部の人が言っているだけでマルクス主義そのものとして向き合っている問題とは言えないというようなことを言っていました。それは佐藤さんのお話とシンクロするところがありました。フレイザーも実践のフェミニズムの出身で、そこでも佐藤さんとつながるところがあって面白いと思いました。ただ同時に思うのは、それでもフレイザーはマルクス主義に対する激烈な関心を有していて、すごく読んでいるし、気になって

いるし、対峙し続ける存在だという印象を受けるんですね。佐藤さんの、マルクス主義やマルクスの著作に対するスタンス、関わり方の度合いはどうなんでしょうか。

今回書いた本でとても面白い問題があって、それでマルクスを読み直したんです。アーレントは「評議会(Council)」のことをとても高く評価していますね。でも、なぜそんなに評価しているのかということは意外にみんな書いていないんです。私もよく分からなくて、ソヴィエトとかレーテとか評議会とか、単語しか知らない人がほとんどでしょ。

●評議会制についての文献も少ないですよ。アーレントが忘れ去られたと言っている通りで、なかなか文献が見つからないです、とくに英語圏では。

アーレントが『革命について』で引用もしている Oskar Anweiler “Die Rätebewegung in Russland(ロシアにおけるレーテ運動)1905-1921”(Leiden、1958年)というとてもいい本があります。それを読むとほとんど分かっちゃいますね。それから最近、クロード・ルフォールの『民主主義の発明』(渡名喜他訳、勁草書房、2017年)という翻訳が出ています。先ほど言ったように、私は1985年に初めて東ドイツに入りました。東ドイツには日本人が想像できない面白い文化がありました。一つは最もベンヤミン研究が進んでいたことです。それから、Ästhetik und Kunst Wissenschaft(美学芸術学)のとても立派な先生がいて、私が資本主義国の日本からやって来た珍しい人間で、しかも Independent 派のようだからと、会ってくれました。それで話をしていたら、「佐藤さん、私は東ドイツに住んでいるので行くことができないんですけど、良かったらフランスに行って、クロード・ルフォールに会ってごらん」と言われたんです。その頃はクロード・ルフォールがどんな人物か全然知りませんでした。今は思想界で結構有名になってきましたね。その時会えたら良かったなと思いますが、残念ながら会えませんでした。その後ルフォールがいかに面白い人かだんだん分かってきました。彼は率直に書いているんで

す、もともと第 4 インターに近い立場でやっていたのだけど、ある時自分が言っていることとアーレントが言っていることに共通性があると気が付いた。実際、見事にアーレントに近い思考の枠組みで考えている人ですね。

ところで、ハンガリー革命のことに戻ると、これをきちんと調べるのは、たしかになかなか大変なんです。ところがルフォールの『民主主義の発明』の約半分は、ハンガリー革命中に必死に書いた同時進行的な論文で、とても面白く重要なものです。

さらに話を元に戻しますが、評議会問題を考えるために、マルクス、レーニンを読み返したんです。ある時期にマルクスやレーニンを真剣に読みましたが、今は自分にとって過去形だと思っていました。でも今回読み返してみて、とても良かったです。そして、今日に至る一党独裁の問題の根源はレーニンだということが分かりました。これはマルクスにもつながる問題ですが、近代社会主義革命の最大のネックは何かと言うと農民問題なんです。農民というのは、単純化して言うと、自分の土地を与えられればそれでいいんですよ。その後協同組合を作るなんていうのは、トラクターを借りる時とか、最低限のことで協力すればいいんであって、生産の単位として大工業のような協力の仕方は要らない。だから、民主主義革命にあたるころまでは農民は大賛成するんです。そうするとレーニンなんかは、それでは民主主義革命で終わってしまう、しかし食糧を握っているこの連中を抑え込むにはどうしても内在的な運動ではできない、そこを党が指導して強引にでもやるしかない、ロシア革命の時から真剣に考えたんです。マルクスもそのことはすでに 48 年革命の時から気が付いていました。ただ彼はオプティミズムで誤魔化していました。

斎藤幸平さんや柄谷行人さんが、コモンズが重要だと叫んでいるじゃないですか。ではコモンズがなぜ必要なのかという問題をとことんまで問うと、一応彼らは、人間には空気や水のように、できるだけ公共的なものがあつた方がいいという議論ですね。ところがマルクスは、非常に面白い理論を立てています。資本の根源的蓄積についての章が『資本論』第 1 巻の最後にあります。エンクロージャーを始めとする私的所

有の剥奪がいかにかに人々を悲惨な目に会わせたかという議論が出てくるんですが、その論理の核には不思議な議論があるんです。今回勉強して初めて知ったんですが、中世の農奴や農民たちのほとんどは、実は私的所有が保障されていたんですよ。自分の家の土地と、自分の食料を作るための耕地は保障されていました。アーレントが私的所有について、自分の家と垣根で囲われた空間と書いていて、何でそういうふうを書くんだろうと疑問でしたが、マルクスが言うように、中世の農民は本源的に私的所有が保障されていて、農奴というのは移動の自由が奪われているとか、初夜権で女の人を出さなきゃいけないとか、税金を納めたり賦役をやらなきゃいけないという上からの拘束はあるけれど、それ以外の生きるための最低限は絶対的権利として保障されていたわけです。それだけではなくて、コモンズ、つまり入会地の地域も保障されていました。入会地は何をする所かと言うと、薪や枯れ草を集める土地、家畜を飼っている場合はその牧草地、泥炭・褐炭などの燃料を集める所でした。それは個人所有ではないけれど、封建領主などの共有地として存在していて、これに関して封建領主は基本的に関与しなかったんです。封建領主が命令したことは賦役など先にあげたことだけであって、むしろ前近代の方が、私的所有が保障されていたという話が出発点なんです。それから、アーレントがマルクスのことを評価していた所があつて、それは「木材窃盗取締り法」に関する論文(1842 年)、『ライン新聞』でジャーナリストをやっていた時にマルクスが一番最初に書いた論文の一つです。ドイツは、マルクスの頃になって突然イギリスのエンクロージャーと同じように、領主たちが今まで共有地として認めていたのに、これは自分の土地だから勝手に枯れ木とか取っちゃだめだと禁止したんです。この禁止をめぐっておかしいじゃないかという議論を始めた時から、マルクスの近代的所有に関する議論が始まりました。

マルクスは最初、コモンズの空間からの追い出しが始まったことから、コモンズの問題が重要だと言ったわけです。だけどエンクロージャーは実は私的所有まで奪うわけですよ。それをマルクスが何と言っていたかと言うと、『共産党宣言』の中では、私的所有

はブルジョワジーにとって搾取の手段の最も有力な起源なので、これをなくさないでだめだという議論が前面に立ってしまったんです。確かに、労働者や農民の私的所有まで奪うべきだとは思っていないとちゃんと書いているんだけど、それが近代社会の中でもつ意味と後の社会でもつ意味をどういうふうにかという問題、コモンズと私的所有の関係の問題を積極的な意味で議論しませんでした。むしろコモンズの空間が重要なんだという議論に移り、労働者の共有形態と同じように農民問題を考えればいいんだという議論に移っていったんです。しかし最後に反省して、ザスーリッチとかが言っていたロシアのミール(農村共同体)の運動形態について、結局その形態だったらむしろそのままでも農民問題はうまくいくんじゃないか、マルクス主義的あるいはレーニン主義的な集合化や社会的所有とか共同的所有という議論を新しい段階でやらなくてもいいんじゃないかというのが、あの議論の中核なんです。つまり農民問題は解決できない。それでも『資本論』第1巻の最後では、相変わらず工業生産の部門は社会的所有になるべきだという議論になっていて、私的所有の根本的意味をマルクスは本気で考えていないんです。でも、私的所有があらゆる自由の基礎だと言っているんですよ。マルクスは確かに途中から、社会変革論に関して自分の理論の通りにはいかないという悩みをもって研究しています。資本主義の基本構造を分析する科学者の態度はすごく立派です。資本主義の基本的矛盾に関する枠組みのことをきちんと考え、しかも、斎藤幸平さんが言うように、中世の農民やローマ的形態における私的所有のことを調べる時も、ずいぶんきちんと調べていい加減なことは言わない。でも、いい加減なことは言わない代わりに、解決の見通しはなくて莫大な研究ノートで終わっている。そこがマルクスの良さでもあり悪さでもあるのかなと思います。その後闘争の武器としてのマルクスが出てきちゃったわけですし。そういう意味で言うと、私の意見ではマルクスはまだ死んでいなくて、根本的に位置付け直さなきゃいけないと思います。大事だし、とつても誠実で真摯な人だと思います。

ただ、ナンシー・フレイザーがどういうふうに思っ

いるかという問題は、率直に言うと、多分ちよつと違うんじゃないでしょうか。アメリカという社会は、やはりマルクス研究の仕方が、日本のように徹底した研究じゃないと思うんです。日本は世界でも一番細かい所まで研究していると私は思いますけどね。

●ありがとうございました。最後に、唯研の若手や中堅の会員に向けてメッセージがあれば、お願いします。

誤解かもしれないけれど、唯研が今の社会構造を批判する団体になってしまっている気がします。批判は正当ですけど、批判ではなくて、私たちが今何を作らなきゃいけないかという問題を本格的に提起しないと、学会としては意味がないのではないかと私は思っています。私たちが一切を本気で作らなきゃいけない時代に入っているわけじゃないですか。たとえば、良くも悪くもZoomで授業をやらなきゃいけないとんでもない時代になって、授業って一体どうやって成り立つんだろうという問題が問われています。私は今、家族やセクシュアリティなどの問題について新しい本を作ろうとしているんですが、本当にカップル関係ないし男女関係も、こういうふうにしたらどうなの、私たちはこうしたいよという議論を立てないと、何かやはり批判の立場が決まっている学会のように聞こえちゃうと私は思いますね、率直に言うと。それでは面白くないというのが私の実感です。ぜひ新しい問題をみんなで立てて考える会になってほしいと思います。

●現代の思想的課題やこれからの思想的展望を考えていくうえで、また唯研のあり方を考えるうえで、大変示唆に富むお話でした。今日は長時間にわたってお話しいただき、ありがとうございました。